《学会報告》

『中国・貴陽（修文）第三回国際陽明文化節及陽明学術研討会』

二〇〇五年九月十四日―一六日　貴州省貴陽市修文県珍珠島

主催者　国際儒学連合・中共貴陽市委員会

貴陽市人民政府・貴州省文化庁

主たる行事

（1）国際陽明文化節開会式・王陽明像・碑林除幕式

（2）高端論壇（修文県文化館）参加。

テーマ、良知と和諧社会

パネラー　成中英（ハワイ大学）楊国栄（華東師範大）

杜維明（ハーバード大）張立文（人民大）

高柏園（淡江大）梁燕城（カナダ大）

（3）陽明学学術研討会（四分科会に分けて参加）

テーマは、良知の現代的意義、王陽明及びその後学の研究陽明学の近代、現代思想に対する影響。陽明学の海外における発展。陽明学と二十一世紀等。

学術研討会の参加者は海外・国内から約六〇名。

論文提要に投稿した人は九十名ほどあったが、すべてが参加してはいない。

日本からの参加者は、古藤友子（国際基督大）「二宮尊徳与陽明学」。永冨青地（早稲田大）「『新刊陽明先生文録』の研究」。難波征男（福岡女学院大）「山田方谷の養気説力らみた陽明学」。海老田輝巳（九州女子大）「王陽明の養生思想と現代的意義」。疋田啓佑（福岡女子大）「日本の陽明学―春日潜庵と明治維新」。

（疋田啓佑）

陽明学関係書　紹介と短評（続）

○永冨青地　著「陽明学の回顧と展望―近年における中国の動向を中心に―」（土田健次郎　編『近世儒学研究の方法と課題』平成一八年二月　汲古書院刊　所収）

本論は、永冨氏が留学後に、中国における明代思想史研究が本格化したものとして、陳来著『有無之境』、楊国栄著『王学通論』を紹介して以後の、中国における明代思想の研究の書籍を紹介しつつ、其の書の持つ特色、意義、問題点を述べている。其の書は、呉光・銭明・董平・姚延福　編『王陽明全集』（上海古籍出版社）、楊国栄『心学之思』（三聯書店）、陳来『中国近世思想史研究』（商務印書館）、呉震『明代講学活動系年　一五二二―一六〇二』、林海権『李贄年譜考略』、彭国翔『良知学的展開―王龍渓与中晩明的陽明学』の6書で、それらについて述べた後、九〇年代以降の通史、概説書として陳来『宋明理学』、張学智『明代哲学史』の2書について述べ、近年における中国の研究者は、本国人として本来具えている読解力に加え、哲学の内在的理解とその分析においても、日本の研究者以上の力を見せていることを述べている。

最近作の『明代哲学史』に、李書増・岑青・孫玉傑・任金鑒　共著の『中国明代哲学』（河南人民出版社）という、1886頁にわたる大著が刊行されていることを付記しておきたい。